

育児不安に関する研究：父親の場合

住田, 正樹
教育社会計画学講座：教授：地域教育社会学

藤井, 美保
香蘭女子短期大学：助教授：教育社会学

<https://doi.org/10.15017/950>

出版情報：大学院教育学研究紀要．1，pp.79-98，1999-03-31．九州大学大学院人間環境学研究科発達・社会システム専攻教育学コース
バージョン：
権利関係：



育児不安に関する研究

—父親の場合—

住田正樹・藤井美保

《目次》

1. 育児不安研究の問題
2. 育児不安の規定と類型
 - (1) 育児不安の規定
 - (2) 育児不安の類型
3. 研究の目的と分析の枠組 (以上, 住田)
4. 調査の概要
5. 調査結果の分析
 - (1) 父親の育児参加と育児不安
 - (2) 夫婦関係と父親の育児不安
 - (3) 母親の育児不安と父親の育児不安の関係
6. まとめ (以上, 藤井)

1. 育児不安研究の問題

本稿は、父親の育児不安の実態を母親の育児不安との関連において明らかにすることを目的としている。母親の育児不安については、既に牧野をはじめとする幾つかの研究があるが⁽¹⁾、父親の育児不安についての研究は未だ見あたらない。

これまで、育児はもっぱら母親に委ねられており、育児は、すなわち母子関係の問題であるとする観念が広く浸透していたから、育児に関する研究についても母親以外の諸要因との関連を考察するという視点には欠けていた。と同時に、そのことは逆に言えば、母親の育児能力そのものについても問題の視野から除外することにもなっていた。母親は育児能力を既に備えているものだ、つまり母親は母性を生得的に備えているものだと前提があったからである。だが、近年になって育児に悩み、不安を訴える母親が現れ、ときには育児ノイローゼに陥るようなケースが多々報告されるに及んで、漸

く育児問題にも関心が向けられるようになってきた。こうした社会的背景には核家族化の進行、家族内関係の変化、とりわけ夫婦関係の変化、女性の自立・自己実現に対する要求の拡大等があり、そしてその基底には戦後一貫して流れる私生活化への傾斜という社会的風潮がある。

牧野は、こうした母親の育児の問題を育児不安に焦点を当てて分析した⁽¹⁾。牧野は、育児不安を子の現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態と規定し、育児の不安徴候の特性として一般的疲労感、一般的気力の低下、イライラの状態、育児不安徴候、育児意欲の低下を考え、育児不安測定尺度を考案した。こうした視点から牧野は乳幼児期の子どもをもつ母親を対象に調査し、以下の結論を得ている。①育児不安は母親の年齢や子どもの年齢、子どもの数や家族構成とは関連がない。②育児不安は、夫婦関係や母親の人間関係のあり方と強く関連する。すなわち、夫が育児に協力的であり、夫との関係に充実感、幸福感を感じている妻は育児に自信をもち、育児不安は低い。夫が育児に協力的でないとする妻は情緒的に不安定で、孤独感や圧迫感を感じている。また近隣や地域活動など人間関係が広い妻は、育児不安が低い。③子どもとの距離が密接で、子どもを生き甲斐とするような意識をもっている母親は育児不安が高い。④母親が子どもから離れて自分の時間をもつこと、趣味をもつこと、社会活動や学習のために外に出ることなど、子どもから離れる活動が育児不安を低くする。

牧野の研究以後、母親の育児不安についての調査研究が相次いでなされたが⁽²⁾、いずれの調査研究においてもほぼ同様の結論を得ている。これらの調査研究の結果をいま要約的に述べると以下のようである。

(1) 母親の属性について

- ① 母親の年齢と育児不安とは関連がない。
- ② 無職の、つまり専業主婦の母親ほど育児不安は高い。フルタイムで勤務している母親の育児不安は低い。

(2) 夫婦関係について

- ① 夫の家事・育児への参加度が高いほど妻の満足度は高く、かつ妻（母親）の育児不安は低い。
- ② 夫婦間のコミュニケーションの頻度が高いほど、妻（母親）の育児不安は低い。

(3) 母親の社会的活動について

- ① 近隣関係が豊富な母親ほど育児不安は低い。
- ② 社会活動への参加度が高い母親ほど育児不安は低い。

しかしながら、これまでの調査研究の難点は、育児不安の概念の曖昧さとそれ故の育児不安測定尺度の妥当性にある。本村らが指摘しているように⁽³⁾、そしてまた後に牧野自身も述べていることだが⁽⁴⁾、育児不安を測定するために、例えば、一般的疲労感や一般的気力の低下を測定項目とすることに果たして妥当性があるだろうか。不安現象それ自体を見れば、不安は心理生理的現象だろうが、不安の喚起の源泉は当の個人の生活の中にあり、したがって不安の程度と内容は当の個人の生活のあり

方に強く規定されるだろう。そしてまた一口に不安といっても、その内容も程度も、その喚起する源泉によって異なるのではないか。育児に対する漠然とした不安もあるだろうが、反面において対象が明確な不安もあるのではないか。子どもの病気や事故についての不安など。そうとすれば、そうした不安に対する母親の態度・行動も異なってくるだろう。つまり不安のタイプによって母親の態度・行動も異なってくるのではないか。さらにいえば、そもそも子どもに無関心な母親は初めから育児不安をもつことなどないだろう。だから本村らも述べているように、育児不安が低い母親は必ずしも問題がないというわけではないのである。「育児不安は、母親ならば、誰しもある程度はもっているものである。問題は不安があることではなく、その不安が病的なほどに高く、通常の判断力や感覚のバランスを失うことにある。」⁽⁶⁾のである。

そこで、われわれは育児不安の調査を実施するに当たり、育児不安の概念を明確化するために、不安の概念から検討し、育児不安をその内容によってタイプ化し、それぞれのタイプの育児不安を規定する社会的要因を分析しようとしたのである。

2. 育児不安の規定と類型

(1) 育児不安の規定

育児は、もともと乳幼児に対する養育者（多くの場合、母親）の肯定的感情に支えられている。養育者の安定的な肯定的感情が育児という行為の基底をなすといつてよい。だが、母親が育児に自信を喪失したり劣等感や焦燥感を抱いたり、あるいは子どもに対して不快感や失望感を抱くと、この肯定的感情は揺らぎ、不安定な状態に陥る。そしてこの不安定な状態が持続すると肯定的感情は希薄化して沈降し、替わって育児に対する劣等感や焦燥感、不快感や失望感から生み出される漠然とした恐れが隆起してくる。育児に否定的な、悲観的な、不快な情動が沸き上がってくるのである。これが育児不安である。だから育児に対する肯定的感情が確固としている限り不安感情は起きない。

不安は何かに対して漠然とした危険や恐れを感じることから生じる不快な情動現象であり、発汗、動悸、目眩、冷感といった身体的症状を伴うこともあるから、不安の現象それ自体を見れば疑いもなく心理的生理的現象なのであるが⁽⁶⁾、しかし不安の対象は何なのか、不安の内容はどのようなものなのか、そして不安の喚起力はどの程度のものなのかを突き詰めてみると、不安の喚起の源泉は当の個人の生活のなかにあり、不安の内容も程度も当の個人の生活のあり方に規定されていることが理解できる。その意味で不安は社会的現象だといつてよい。個人が日常の生活のなかでの課題達成に対して何らかの妨害を感じ、それを克服できずに劣等感や焦燥感、不快感や失望感を抱いて、その課題遂行に危険や恐れを感じたときに不安が喚起してくるのである。だが、何を妨害と感じるか、その妨害による危険や恐れをどの程度感じるか、また身体的にどのように反応するかは個々の主体によって異なり、さらにまた何を課題として設定して日常生活の枠組を構成するかは個人の主体性によるから、不安は主観的な現象でもあるといえる。

しかし、不安喚起の源泉が個人の生活のなかにあるからといって、不安の対象が1つとは限らない。

複数の不安対象が存在する場合もある。不安対象が複数の場合、不安喚起力は単に加算されるのみならず、相乗的な効果を発揮する。さらに不安の対象は個人の外部にのみ存在するとは限らない。不安が主観的な現象であるということは、個人の内部においても不安の対象が存在するということである。個人の内部における思考や想像も不安対象となる⁽⁷⁾。将来を不安と結びつけて思考することを繰り返せば、不安と結合した思考が習慣化して不安は増幅していっくだろうし⁽⁸⁾、実際に遂行しないうちから課題遂行の失敗ばかりを思い巡らせていけば、不安が不安を呼んで不安はさらに増大していっくだろう。

不安が増大していっく状況というのは、このように不安対象がたとえ1つであっても、それを常に不安と結びつけて思い巡らすうちに、その思い巡らす思考や想像そのものが不安と化し、かくて不安は深化し連鎖的に反応することによって増幅していっくという過程なのであり、また不安対象が複数であれば、その複数の不安対象が相互に複雑に絡み合い、その相乗的な効果によって不安は強化され、ますます増幅していっくという過程なのである。

母親にとって「育児不安」というのは、こうした不安の典型であるといっくよい。育児不安は、育児という課題遂行の失敗自体から喚起される場合もあるが、育児という課題遂行の失敗に対する恐れから喚起される場合もある。しかしいっくずれにしろ育児は幼い生命を対象にする活動であるから誰もが育児に対する不安をもつ。だから育児不安は特異な現象なのではなく、一般的な現象だといっくよい。しかも育児は新生児・乳幼児の身体的・精神的な成長・発達を促進するという、いわば人格の基礎的な形成とも言える行為であるから、つまるところ環境全般にも関わりを持ち、したがって育児は子どもと環境全般に関わるさまざまな局面にわたる行為なのである。だから育児不安の対象もそれぞれの局面に存在する。育児不安は単に育児をすることという1つの対象から喚起されるのではなく、育児や人格形成に関わる、そしてまた環境に関わるさまざまな局面の、それぞれの対象から喚起されるのである。つまり複数の対象から喚起されるわけである。そうした複数の不安対象が相互に絡み合い、相乗的に作用して、育児不安の喚起力は増大し、育児不安を増幅していっくのである。しかも育児は新生児・乳幼児の人格の基礎的な形成であるとはいっくえ、育児の仕方によって人格の形成は方向づけられ、あるいは規定されて、子どもの将来を生涯にわたって左右することになるから、育児不安は母親の内部における子どもの将来についての思考や想像からも喚起される。母親は子どもの将来をあれこれイメージし想像するが、そうしたイメージや想像を一時的にしろ悲観的、否定的に思い描くだけで不安は喚起される。そしてその喚起された不安な状態のなかで思考し想像を続けていっくれば、その思考や想像は不安と結びついて育児不安はさらに増幅されていっくのである。

こうした母親の育児不安が今日の育児をめぐる最も特徴的な問題になってきていっくいる。母親の育児不安が蓄積されていっくれば、育児ノイローゼとなり、それが高じれば育児放棄や虐待にいたることもあり、母親の育児態度の問題として見過すことのできない問題となる。最近の厚生省や文部省、また自治体の保育政策は、つまるところ、こうした母親の育児不安を軽減し、母親の育児を援助するための事業活動なのである⁽⁹⁾。それは母親の日常生活の背後に育児に直接影響を及ぼし、母親に育児不安を喚起せしめるような社会的問題があり、そうした問題解決に向けての行政の立場からの社会的対応なのである。

(2) 育児不安の類型

先に述べたように、育児は子どもと環境全般に関わるさまざまな局面にわたる行為であり、したがって育児不安も子どもを取り巻く環境の、それぞれの局面に対応して生じる。そこでここでは母親の育児不安を4つのタイプに分類した。

- (A) 育児についての不安な感情
- (B) 子どもの成長・発達に対する不安
- (C) 自分自身の育児能力に対する不安
- (D) 育児によって生じる欲求不満からの不安

である。このうち(D)育児によって生じる母親の欲求不満からの不安は、育児のために自身の生活や行動、さらには生き方や将来性が制限されてしまうと感じることによって生じる欲求不満が投射された形での育児に対する不安である。こうした欲求不満がうまく処理されずに高まれば母親は、いわば自立・自己実現に対して劣等感や焦燥感、失望感を感じることであり、自己の存在への不信感、自己の立場の喪失感に陥ることになるだろう。そうなれば育児に対しても不快感情や否定的感情をもつことになりやすい。そしてこうした4つの育児不安のタイプをさらに以下の側面に細分化した([] 内の数字は、後掲の表1の育児不安タイプの質問文の番号)。

A. 育児についての不安感情

- [a] 子どもの特定の態度・行動に感じる不快な感情
 - ① 母親と子どもとの関係からくる不快感 [3]
 - ② 子どもの行動からくる不快感 [4]
- [b] 子ども自身を否定的に感じるような不快な感情
 - ① 子どもに対する否定的な感情 [5]
 - ② 子どもの存在そのものの否定的感情 [1, 2]

B. 子どもの成長・発達に関する不安

- ① 子どもの成長・発達についての不快感や失望感(自分の思っている成長・発達ほどに子どもが成長・発達しないことに対する失望感) [6]
- ② 子どもの病気や事故など不慮の事故に対する不安 [7]
- ③ 他の子どもの発達と比べて自分の子どもの発達障害に対する不安 [8]
- ④ マスコミの育児情報の氾濫からくる不安 [9]

C. 自分の育児能力に対する不安

- ① 自身の育児能力に対する不安と自信喪失 [10]
- ② 他の母親との比較から生じる育児能力に対する不安 [11]
- ③ 育児情報の氾濫からくる育児能力に対する不安 [12]
- ④ 育児に対する重圧感・圧迫感 [13]

D. 育児によって生じる欲求不満からの不安

- ① 自身の生き方に対する不満・不安 [14]

- ② 友人・知人など身近な人々との比較から生じる不満・不安 [15]
- ③ マスコミの映す女性像との疎隔からくる不満・不安 [16]
- ④ 育児の繰り返しのマンネリ化から生じる孤立感や孤独感 [17]

以上の育児不安の規定と類型にしたがって、われわれは既に母親を対象とした調査を実施し、その成果を日本子ども社会学会大会第4回大会において発表した⁽¹⁰⁾。今日の社会の如何なる問題状況が母親の育児不安を喚起させているのかという問題である。

3. 研究の目的と分析の枠組

(1) 研究の目的

本稿は、先に実施した母親の育児不安に関する研究と同様の分析方法を用い、そしてまたその調査結果と比較しつつ、父親の育児不安の実態を明らかにすることを目的としている。

女性の社会進出に伴い、近年は父親の家事・育児への参加が要請されるようになった。実際、東京都では平成8年から父親になる男性に『父親ハンドブック』を配布している。また育児における父親の役割にも研究の関心が向けられるようになり、調査研究論文も現れるようになった⁽¹¹⁾。

しかし父親の育児不安についての調査研究はまだない。今は父親の家事・育児への参加が漸く問題として取りあげられるようになったばかりであるから、たとえ父親が育児に携わっているとしても、精々母親の育児活動の補助として携わっているに過ぎず、一般的には未だ父親が育児を自身の課題として受けとめてはいないのが現状だと思われるからであろう。だから今の段階で父親の育児不安を問題とするのは時機尚早か、取り上げるほどの重要性はないと思われるのである。しかし事実は未だ何も明らかにされていない。そこでわれわれは、まずは父親の育児についての事実を把握することが必要であると考え、実態の把握を目的に調査を企画・実施したのである。今日の父親は育児にどの程度携わっているのか、育児不安をもっているか否か、育児不安をもっているとすれば、それはどの程度の、どのようなタイプの不安なのか、それは母親の育児不安と同じなのか否か、そして父親の育児不安はどのような社会的背景を起因として生じてくるのか。

(2) 分析の枠組

われわれは、先に述べたように、母親の育児不安を(A)育児についての不安な感情、(B)子どもの成長・発達に対する不安、(C)自分自身の育児能力に対する不安、(D)育児によって生じる欲求不満からの不安、という4つのタイプに類型化したのであるが、ここで取り上げる父親の育児不安についても、同様のアプローチをとる。それは母親の育児不安調査と比較しつつ分析することを目的としているからである。

表1は、母親と父親の育児不安の有無について見たものである。回答は育児不安のそれぞれの項目が「よくある」、「ときどきある」、「ない」の3段階としたが、表には「よくある」と「ときどきある」

育児不安に関する研究

表1 母親と父親の育児不安

(%)

育児不安のタイプ			母親 (570)	父親 (570)
(A) 育児についての不安感情	1	子どもが、わずらわしくてイライラすることが	ある 38.2	47.2 44.9
	2	子どものことを考えるのが面倒になることが	ある 21.1	20.4 71.8
	3	子どもが自分の言うことをきかないのでイライラすることが	ある 82.6	61.1 31.4
	4	子どもが汚したり、散らかしたりするので嫌になることが	ある 64.6	46.3 46.1
	5	自分の子どもでも、かわいくないと感ずることが	ある 21.4	13.4 78.6
(B) 子ども達に自身対する成長不安	6	自分が思っているように子どもが成長しないので成長が遅れているのではないかと思うことが	ある 10.5	14.4 77.5
	7	子どもが病気にかかったり事故にあわないかと心配することが	ある 77.2	77.0 16.0
	8	他の子どもと比べて、自分の子どもの発達が遅れているのではないかと思うことが	ある 11.8	15.8 76.1
	9	育児雑誌や育児書と比べて、自分の子どもの発達が遅れているのではないかと思うことが	ある 7.7	9.5 81.8
(C) 自分に自身対する育児能力不安	10	育児のことで、どうしたらよいか分からないことが	ある 47.7	34.8 59.3
	11	他のお母さんの育て方と比べて、自分の育て方でよいのかどうか不安になることが	ある 44.0	23.9 68.2
	12	テレビや雑誌・本を見て、自分の育て方でよいのかどうか、不安になることが	ある 26.0	16.5 75.6
	13	子どもを、よく育てなければならないという気持を感じることが	ある 67.4	65.1 27.7
(D) 育児欲求に不満から生じる不安	14	子どもに時間を取られて、自分のやりたいことができずイライラすることが	ある 50.0	— —
	15	友人や知人が充実した生活をしているようなので焦りを感じることが	ある 27.4	— —
	16	テレビや雑誌・本などで見る女性の姿と自分を比べて遅れていると感ずることが	ある 32.8	— —
	17	毎日、育児の繰り返しばかりで、社会とのきずなが切れてしまうように感ずることが	ある 31.9	— —

(注) 無回答・不明の比率は省略した。

を合わせて「育児不安あり」としている。但し育児不安のタイプのうち、(D) 育児によって生じる欲求不満からの不安は、先に述べたように、育児のために母親自身の生活や生き方が制限されてしまうと感ずることによって生じる、いわば欲求不満が投射された形での育児に対する不安であるから、このタイプの不安は父親には妥当しない。

ここでは、(A)～(C)の育児不安のタイプを3群にグループ化し、それぞれを比較する方法を

とった。すなわち、(A) 育児についての不安な感情の5項目のうち、4～5項目に「不安あり」と回答した場合を「不安高群」、1～3項目に「不安あり」と回答した場合を「不安中群」、1項目も選択せず「不安なし」と回答した場合を「不安低群」とし、(B) 子どもの成長・発達に対する不安と(C) 自分自身の育児能力に対する不安については、3～4項目を選択した場合を「不安高群」、1～2項目を選択した場合を「不安中群」、1項目も選択しなかった場合を「不安低群」とした。母親の場合は、これに(D) 育児によって生じる欲求不満からの不安が加わるが、この(D)の育児不安の場合も、(B)、(C)と同様にグループ化した。

こうした育児不安の類型にしたがって、それぞれの程度をグループ化し、父親の、それぞれの育児不安の実態を明らかにしようとしたのである。

しかし先に述べたように、そもそも子どもに無関心な親は育児不安をもつことがないだろうから、こうした無関心な親は「不安低群」に入ることになる。だから育児不安が低いからといって問題がないわけではない。だが、ここでの目的は、あくまでも育児不安の社会的要因を探ることにあり、子どもに対する親の問題ではない。そのために、今回の一連の調査では、育児不安の社会的要因を捉えやすいように、育児不安の強度を「高」、「中」、「低」の3群に分け、それを相互に比較することによって、育児不安の社会的背景を分析しようとしたのである。

4. 調査の概要

調査の対象は、保育園児および幼稚園児の母親と父親とし、保育園数および幼稚園数を勘案した上で、保育園については福岡都市圏の都市地域から1園、近郊地域から2園、幼稚園についても同様に都市地域から1園、近郊地域から2園を選定した。質問紙の配布と回収は、園の協力を得て、保育園児および幼稚園児を通して行った。

質問紙は、母親を対象とした質問紙と父親を対象とした質問紙に分け、また記入しやすいように匿名にした。しかし母親の質問紙と父親の質問紙をペアにして回収する計画であったから、質問紙の配布時にあらかじめ返信用封筒を同封し、これにどちらの質問紙も封入して提出するよう父母には依頼した。但し近郊地域の1幼稚園については、父母の質問紙をペアで回収することの説明が不十分だったためか、園の職員の親切心の故に、園児からの回収時に全ての封筒を開封して質問紙を母親用と父親用に分けてしまったため、父母をペアで回収することはできなかった。この幼稚園の園児の母親と父親の質問紙については除外している。なお、調査時期は平成8年2月～5月である。

こうして回収された質問紙は、610組票の配布に対して、570組票(1人親を含む)であり、回収率は93.4%であった。内訳は、保育園については、都市地域のI保育園の場合、配布組票50、回収組票46、回収率92%、近郊地域のF保育園では、それぞれ66、63、95.5%、同じ近郊地域のK保育園では、98、91、92.9%、また幼稚園では、都市地域O幼稚園では、180、163、90.6%、近郊地域のS幼稚園では、216、207、95.8%であり、保育園の合計では、それぞれ214、200、93.5%、幼稚園の合計では、それぞれ396、370、93.4%であった⁽¹²⁾。

5. 調査結果の分析

(1) 父親の育児参加と育児不安

先に述べたように、父親も何らかの形で育児に携わっているとすれば、母親と同じように育児についての不安を抱いているのではないかと、もし抱いているとすれば、どのような不安を、どの程度に抱いているのか。そしてその社会的要因は何かを分析するのが本稿の目的である。

まず、父親の年齢と育児不安との関係を見てみると、表2のように年齢による有意差はなく、父親の年齢と育児不安とは関連が見られない。一般的に言えば、人間は年齢とともに様々な生活経験を蓄積し、その経験をふまえて行動し物事に対処するから、年齢が高いほど自分の行動や物事への対処の仕方に不安を感じる程度が低くなると考えられる。しかし、父親の育児不安の場合は、年齢にかかわらず、すなわち生活経験の多少にかかわらず、同じように育児不安を抱いている。一般的に、女性は子どもの頃から多少とも育児役割を期待され、予期的社会化を受けるのに対して、男性には育児役割が期待されず、幼児と接触したり、世話をしたりする経験が乏しいためであろう。

そうであるならば、父親の年齢（生活経験）よりも、自分の子どもを持った今現在、その子どもとどのように接触しているか、すなわち現在の「子ども経験」のほうが父親の育児不安に影響を与えるのではないだろうか。父親が自分の子どもと直に接触し、観察することによって、育児不安がつのったり、あるいは逆に和らげられたりするのかもしれない。表3は、父親が子どもといっしょに過ごす時間と育児不安との関係を示しているが、これによると父親の育児不安の、どの領域についてみても、父親が子どもと過ごす時間の長短は育児不安と関連がないという結果である。しかし、仮に子どもと過ごす時間が長かったとしても、父親が育児に主体的にかかわっているとは限らない。子どものことにあまり関心がなく、子どもといっしょに過ごしてはいても主体的に育児にかかわっていなければ、

表2 父親の年齢と育児不安

(%)

育児不安のタイプ		29才以下 (31)	30～34才 (128)	35～39才 (209)	40才以上 (162)	全体 (530)	χ^2 検定
		(A) 育児についての不安感情	高	22.6	14.1	21.1	
	中	64.5	62.5	60.3	56.8	60.0	
	低	12.9	23.4	18.7	23.5	20.9	
(B) 子どもの成長・発達に対する不安	高	19.4	14.8	12.0	13.0	13.4	—
	中	67.7	68.8	75.1	66.0	70.4	
	低	12.9	16.4	12.9	21.0	16.2	
(C) 自分自身の育児能力に対する不安	高	9.7	24.2	22.5	16.7	20.4	—
	中	64.5	54.7	57.4	56.2	56.8	
	低	25.8	21.1	20.1	27.2	22.8	

(注) 無回答・不明を除く。以下同様。

表3 父親が子どもと過ごす時間と育児不安

(%)

育児不安のタイプ		多い方だと思 う (213)	少ない方だと思 う (318)	全 体 (531)	χ^2 検定
(A) 育児についての不安感情	高	19.7	18.6	19.0	—
	中	62.9	57.9	59.9	
	低	17.4	23.6	21.1	
(B) 子どもの成長・発達に対する不安	高	13.1	12.9	13.0	—
	中	74.2	68.2	70.6	
	低	12.7	18.9	16.4	
(C) 自分自身の育児能力に対する不安	高	18.8	21.4	20.3	—
	中	55.9	57.2	56.7	
	低	25.4	21.4	23.0	

表4 育児の主な担い手と父親の育児不安

(%)

育児不安のタイプ		主に母親 (464)	夫婦で分担 (52)	全 体 (516)	χ^2 検定
(A) 育児についての不安感情	高	17.9	19.2	18.0	—
	中	61.0	61.5	61.1	
	低	21.1	19.2	20.9	
(B) 子どもの成長・発達に対する不安	高	13.6	11.5	13.4	**
	中	69.0	86.5	70.7	
	低	17.5	1.9	15.9	
(C) 自分自身の育児能力に対する不安	高	19.7	28.8	20.3	—
	中	57.1	53.8	56.8	
	低	23.5	17.3	22.9	

(注) *は $p < 0.05$, **は $p < 0.01$ 。以下同様。

育児について不安を感じることも少ないだろう。

そこで、育児の主な担い手と父親の育児不安との関係を見ると、表4のようであった。(A) 育児についての不安感情と(C) 自分の育児能力に対する不安については、主に母親が育児を担っている場合も、夫婦で分担している場合も、父親の育児不安に差異は見られなかった。しかし、(B) 子どもの成長・発達に対する不安については、主に母親が育児を担っている場合は、高い育児不安を示す父親が13.6%、中程度の父親が69%、育児不安が低い父親が17.5%であるのに対して、夫婦で育児を分担している場合は、高い育児不安を示す父親が11.5%、中程度が86.5%、育児不安が低い父親はわずか1.9%であり、主に母親が育児を担っている場合よりも、夫婦で育児を分担している場合のほうが、

育児不安に関する研究

表5-1 父親の育児参加度と育児不安
「子どもを風呂に入れているか」

育児不安のタイプ		している (462)	あまり していない (67)	全体 (529)	χ^2 検定
(A) 育児についての不安感情	高	18.4	22.4	18.9	-
	中	60.8	55.2	60.1	
	低	20.8	22.4	21.0	
(B) 子どもの成長・発達に対する不安	高	13.0	13.4	13.0	*
	中	72.5	59.7	70.9	
	低	14.5	26.9	16.1	
(C) 自分自身の育児能力に対する不安	高	20.1	22.4	20.4	-
	中	57.4	53.7	56.9	
	低	22.5	23.9	22.7	

表5-2 父親の育児参加度と育児不安
「子どもの遊び相手をしているか」

育児不安のタイプ		している (466)	あまり していない (66)	全体 (532)	χ^2 検定
(A) 育児についての不安感情	高	17.0	33.3	19.0	**
	中	61.1	53.1	60.1	
	低	21.9	13.6	20.9	
(B) 子どもの成長・発達に対する不安	高	13.7	10.6	13.3	-
	中	70.6	69.7	70.5	
	低	15.7	19.7	16.2	
(C) 自分自身の育児能力に対する不安	高	20.6	19.7	20.5	-
	中	57.7	50.0	56.8	
	低	21.7	30.3	22.7	

子どもの成長・発達に対する父親の不安が高いという傾向がみられる。母親任せにするのではなく、より主体的に育児に関わる父親のほうが、子どもに関心を持ち、子どもの実態をつぶさに観察する結果、成長や発達が遅れているのではないかと不安や心配を抱くのであろう。

このことは、「子どもを風呂に入れる」といった具体的な育児行動への参加の有無からもわかる。表5-1によると、子どもを風呂に入れる父親のほうが、それをあまりしない父親よりも、(B)の成長・発達に対する不安が高い傾向が見られる。風呂に入れるという形で育児参加をすることで、子どもの身体を身近に観察する機会ができ、身体的な成長・発達に対して不安を抱くけれども、風呂に入

れることがなければ、子どもの身体のことについて気が付くこともなく、不安を感じないのであろう。

しかし、同じ育児参加でも「子どもの遊び相手をする」という育児行動については、結果が異なっている。表5-2によると、子どもの遊び相手をする父親のほうが、(A)の育児についての不安感情が低く、あまり遊び相手にならない父親のほうが、育児についての不安感情が高い。育児についての不安感情というのは、「子どもが煩わしい」とか「汚したりしてイライラする」といった感情であるから、日頃から子どもの遊び相手をしている父親は、子どもとはそんなものだと思うのに対して、あまり遊び相手にならない父親がたまに子どもと遊んだりすると、子どものことが煩わしく感じられるのではないか。

(2) 夫婦関係と父親の育児不安

さて、先に、母親が主に育児を担っている場合は父親の育児不安は低いと述べたが、それは育児を母親に任せ、満足し安心しているということなのだろうか。父親が母親の育児の仕方に満足していればあまり育児不安を感じずにすみ、反対に母親の育児の仕方に不満であれば、育児不安を感じるようになるのではないか。表6は、母親の育児に対する父親の満足度と育児不安の関係について見たものである。ここでは、母親の満足度をとらえるために、母親が子どもに生活習慣のしつけをきちんとしているかを父親に尋ねた。これによると、母親が生活習慣をよくしつけていると考える父親は、(A)の育児についての不安感情が低く、母親があまりしつけていないと考える父親は育児についての不安感情が高い。つまり、母親の育児に不満がある父親は、子どもに対してイライラしたり煩わしいと思ったりするのである。母親のしつけができていないから、子どもが言うことをきかなかったり、散らかしたりする。だから、父親はそうした母親の育児に不満を抱くし、イライラして育児不安感情が高まるということであろう。

表6 母親の育児に対する父親の満足度と育児不安

「母親が子どもの生活習慣のしつけをしているか」

(%)

育児不安のタイプ		している (441)	あまり していない (87)	全体 (528)	χ^2 検定
(A) 育児についての不安感情	高	15.4	36.8	18.9	**
	中	64.0	41.4	60.3	
	低	20.6	21.8	20.8	
(B) 子どもの成長・発達に対する不安	高	13.4	12.6	13.3	-
	中	70.5	71.3	70.6	
	低	16.1	16.1	16.1	
(C) 自分自身の育児能力に対する不安	高	19.5	25.3	20.5	-
	中	57.4	54.0	56.8	
	低	23.1	20.7	22.7	

表7 母親とのコミュニケーションの程度と育児不安

(%)

育児不安のタイプ		母親とのコミュニケーションが多い (208)	母親とのコミュニケーションが少ない (322)	全体 (529)	χ^2 検定
(A) 育児についての不安感情	高	13.9	22.4	19.1	*
	中	61.1	59.3	60.0	
	低	25.0	18.3	20.9	
(B) 子どもの成長・発達に対する不安	高	10.1	14.9	13.0	-
	中	73.6	68.6	70.6	
	低	16.3	16.5	16.4	
(C) 自分自身の育児能力に対する不安	高	16.8	22.7	20.4	-
	中	55.8	57.1	56.6	
	低	27.4	20.2	23.0	

表8 夫婦間のコミュニケーションに対する認知

(%)

		母親の認知		計 (570)
		多い	少ない	
父親の認知	多い	I型	II型	36.5
	少ない	III型	IV型	56.6
計		56.3	40.8	

いずれにせよ、父親が母親と十分にコミュニケーションをとり、育児に対する考え方や態度を一致させていけば、母親の育児の仕方に対して不満を抱いたり、育児不安を感じたりしないのではないだろうか。そこで、父親と母親とのコミュニケーションと、父親の育児不安との関係を見てみよう。表7に示しているとおりに、成長・発達に対する不安と育児能力に対する不安については有意な差が見られなかったものの、育児についての不安感情

については、母親とのコミュニケーションが多い父親は不安感情が低く、母親とのコミュニケーションが少ない父親のほうが不安感情が高い。父親が日頃から母親とよくコミュニケーションをとっているならば、子どもの様子もよくわかり、不安感情を抱かなくてすむということであろう。あるいは、母親となかなかコミュニケーションできない程に父親が忙しく、忙しいと何に対してもイライラしがちになって、子どもに対しても煩わしさを感じるのかもしれない。

ところで、母親とのコミュニケーションの程度については、父親の認知を尋ねたものであるが、これを、母親が父親とどの程度コミュニケーションをとっているかという母親の認知と比較してみると、表8のようにかなり大きなズレが見られる。父親の場合は、コミュニケーションが多いと認知しているものが36.5%、少ないと認知しているものが56.6%であるのに対して、母親の場合は、多いと認知しているものが56.3%、少ないと認知しているものが40.8%である。父親は母親とあまりコミュニケーションをしていないと思っても、母親は結構コミュニケーションをしていると思っているのである。

そこで、両者を組み合わせて、夫婦のコミュニケーションのタイプを4つに分類した。父親も母親

表9-1 夫婦のコミュニケーション・
タイプと父親の育児不安感情 (%)

	(A) 父親の育児不安感情		
	高	中	低
I 型	12.9	59.6	27.5
II 型	19.4	66.7	13.9
III 型	17.0	61.7	21.3
IV 型	26.8	57.6	15.6

p<0.05

表9-2 夫婦のコミュニケーション・
タイプと父親の成長・発達不安 (%)

	(B) 父親の成長・発達不安		
	高	中	低
I 型	9.9	73.1	17.0
II 型	11.1	75.0	13.9
III 型	15.6	66.0	18.4
IV 型	14.5	70.9	14.5

表9-3 夫婦のコミュニケーション・
タイプと父親の育児能力不安 (%)

	(C) 父親の育児能力不安		
	高	中	低
I 型	15.8	54.4	29.8
II 型	22.2	63.9	13.9
III 型	19.9	58.9	21.3
IV 型	25.1	55.3	19.6

もコミュニケーションをよくとっているというI型、父親は多いと思っているが母親は少ないと思っているII型、その逆に父親は少ないと思っているが母親は多いと思っているIII型、そして両者ともにコミュニケーションが少ないと思っているIV型である。この4つのタイプ別に父親の育児不安感情を示しているのが表9である。

これによると、両親ともにコミュニケーションを多くとっていると認知しているI型では、父親の育児についての不安感情は低く、逆に両親ともコミュニケーションが少ないと認知しているIV型では、育児についての不安感情が高くなっている。やはり、父親と母親のコミュニケーションが不足すると、父親が育児に対して煩わしさやイライラを感じるようになり、逆にお互いにコミュニケーションを十分にとっていれば、父親が育児に対して煩わしく感じたり、イライラしたりする度合いが低くなるという結果である。しかし、それ以上に注目したいのは、II型とIII型の結果である。父親はコミュニケーションを多くとっていると思っているのに、母親はコミュニケーションが少ないと思っているII型の方が、父親はコミュニケーションが少ないと思っても母親はコミュニケーションが多いと思っているIII型よりも、父親の育児不安感情が高くなっている。II型の場合は、母親は父親ともっとコミュニケーションをとりたいと思っているのに、父親はすでに十分だと思っているのであるから、母親は育児にともなう不安や不満を

父親と分かち合うのではなく、1人で抱え込むことになり、母親の父親に対する不満や育児不安が高まって、それが父親の育児不安感情に影響を及ぼしているのではないだろうか。

表10-1は、夫婦のコミュニケーションのタイプと母親の育児不安感情との関係を示しているが、これによると、父親はコミュニケーションが多いと思っているのに、母親は少ないと思っているII型の母親が、育児不安感情が最も高い。このように、夫婦間のコミュニケーションに対する母親の不満が、母親自身の育児不安感情を引き起こしているのである。そして、その母親の育児不安感情が父親の育児不安感情を引き起こしているのであろう。ただし、夫婦のコミュニケーション・タイプと子ども

表10-1 夫婦のコミュニケーション・タイプと母親の育児不安感情安 (%)

	(a)母親の育児不安感情		
	高	中	低
I 型	17.5	70.2	12.3
II 型	41.7	55.5	2.8
III 型	24.1	62.4	13.5
IV 型	30.2	64.2	5.6

p<0.01

表10-3 夫婦のコミュニケーション・タイプと母親の育児能力不安 (%)

	(c)母親の育児能力不安		
	高	中	低
I 型	31.0	46.2	22.8
II 型	41.7	41.7	16.6
III 型	28.4	51.7	19.9
IV 型	41.9	43.6	14.5

表10-2 夫婦のコミュニケーション・タイプと母親の成長・発達不安 (%)

	(b)母親の成長・発達不安		
	高	中	低
I 型	4.1	83.6	12.3
II 型	11.1	61.1	27.8
III 型	10.6	67.4	22.0
IV 型	9.5	70.4	20.1

p<0.05

表10-4 夫婦のコミュニケーション・タイプと育児による母親の欲求不満 (%)

	(d)育児による母親の欲求不満		
	高	中	低
I 型	18.7	45.6	35.7
II 型	30.6	41.6	27.8
III 型	23.4	46.1	30.5
IV 型	23.5	51.9	24.6

もの成長・発達に対する母親の不安との関係については逆の結果が得られている。表10-2からわかるように、父親はコミュニケーションが多いと思っているのに、母親は少ないと思っている、つまり、コミュニケーションに対する母親の不満が最も高いと思われるII型で、成長・発達に対する母親の不安が最も低くなっているのである。子どもの成長発達に対して母親が不安を抱いていると、父親とコミュニケーションをよくとって育児について相談し、逆に不安がなければあまりコミュニケーションをしないということかもしれない。また、母親の育児能力不安、育児による母親の欲求不満については、夫婦のコミュニケーション・タイプとの関連は見られなかった。

ここまで夫婦のコミュニケーションと育児不安との関係について見てきたが、父親は十分にコミュニケーションをしていると思っても母親がそう思っていなければ、父親の育児不安感情が高まること、また母親の育児不安感情も高まることが明らかになった。このことから、コミュニケーションに対する母親の不満が、母親の育児不安感情を引き起こし、それがさらに父親の育児不安感情を引き起こすのではないかと考えられる。そこで、母親の育児不安と父親の育児不安との関係を考察することにした。

(3) 母親の育児不安と父親の育児不安の関係

表11-1, 表11-2 および表11-3は, 母親の育児に対するイライラや煩わしさなどの不安感情と, 父親の育児不安との関連を示しているが, これらの表から, 母親の育児についての不安感情が高ければ, 父親の育児不安感情が高く, また, 子どもの成長・発達に対する父親の不安や父親自身の育児能力に対する不安も高いことがわかる。母親が育児に煩わしさを感じたり, イライラしたりすると, それを受けて父親の育児不安がどの領域についても高まるというわけである。

では, 子どもの成長・発達に対する母親の不安は, 父親の育児不安にどのように影響を与えるのだろうか。表12-1に示されているとおり, 母親が子どもの成長・発達に不安を感じていても, 父親は

表11-1 母親の育児不安感情と父親の育児不安感情 (%)

		(A)父親の育児不安感情		
		高	中	低
(a) 母親の育児不安感情	高	23.7	55.4	20.9
	中	16.5	58.6	24.5
	低	11.5	42.6	45.9

p<0.01

表12-1 母親の成長・発達不安と父親の育児不安感情 (%)

		(A)父親の育児不安感情		
		高	中	低
(b) 母親の成長・発達不安	高	15.6	57.7	26.7
	中	19.5	57.1	23.4
	低	12.2	52.1	35.7

表11-2 母親の育児不安感情と父親の成長・発達不安 (%)

		(B)父親の成長・発達不安		
		高	中	低
(a) 母親の育児不安感情	高	19.4	61.9	18.7
	中	11.1	67.0	21.9
	低	4.9	67.2	27.9

p<0.05

表12-2 母親の成長・発達不安と父親の成長・発達不安 (%)

		(B)父親の成長・発達不安		
		高	中	低
(b) 母親の成長・発達不安	高	33.3	53.4	13.3
	中	12.7	68.5	18.8
	低	3.5	60.8	35.7

p<0.01

表11-3 母親の育児不安感情と父親の育児能力不安 (%)

		(C)父親の育児能力不安		
		高	中	低
(a) 母親の育児不安感情	高	29.5	49.6	20.9
	中	16.8	54.1	29.2
	低	9.8	54.1	36.1

p<0.01

表12-3 母親の成長・発達不安と父親の育児能力不安 (%)

		(C)父親の育児能力不安		
		高	中	低
(b) 母親の成長・発達不安	高	28.9	55.5	15.6
	中	19.8	53.9	26.3
	低	13.0	48.7	38.3

p<0.05

育児不安に関する研究

育児に対するイライラなどの不安感情を感じているわけではない。しかし、表12-2および表12-3からは、母親が子どもの成長・発達に不安を感じると、父親も子どもの成長・発達に不安を感じるし、父親自身の育児能力にも不安を感じることがわかる。

表13-1、表13-2および表13-3は、自分の育児能力に対する母親の不安と父親の育児不安との関係を示している。これらの表によると、自分の育児能力に対する母親の不安は、子どもにイライラするなどの父親の育児不安感情には影響を与えないが、母親が自分の育児能力に不安を感じれば感じるほど、父親は子どもの成長・発達に不安を感じ、自分自身の育児能力にも不安を感じる傾向が見られる。

表13-1 母親の育児能力不安と父親の育児不安感情 (%)

		(A)父親の育児不安感情		
		高	中	低
(c) 母親の育児能力不安	高	20.5	58.0	21.5
	中	17.1	54.8	28.1
	低	14.3	56.2	29.5

表14-1 母親の欲求不満感情と父親の育児不安感情 (%)

		(A)父親の育児不安感情		
		高	中	低
(d) 母親の欲求不満感情	高	23.0	57.2	19.8
	中	18.9	55.2	25.9
	低	12.1	56.9	31.0

表13-2 母親の育児能力不安と父親の成長・発達不安 (%)

		(B)父親の成長・発達不安		
		高	中	低
(c) 母親の育児能力不安	高	15.9	66.2	17.9
	中	10.6	68.9	20.5
	低	10.7	58.0	31.3

p<0.05

表14-2 母親の欲求不満感情と父親の成長・発達不安 (%)

		(B)父親の成長・発達不安		
		高	中	低
(d) 母親の欲求不満感情	高	15.1	64.3	20.6
	中	13.3	64.8	21.9
	低	9.2	68.4	22.4

表13-3 母親の育児能力不安と父親の育児能力不安 (%)

		(C)父親の育児能力不安		
		高	中	低
(c) 母親の育児能力不安	高	28.2	50.3	21.5
	中	15.2	58.2	26.6
	低	12.5	45.5	42.0

p<0.01

表14-3 母親の欲求不満感情と父親の育児能力不安 (%)

		(C)父親の育児能力不安		
		高	中	低
(d) 母親の欲求不満感情	高	33.3	44.5	22.2
	中	17.0	56.7	26.3
	低	12.1	53.4	34.5

p<0.01

また、主たる育児の担い手であることによって生じる母親の欲求不満と父親の育児不安との関係を見ると、父親の育児不安感情と子どもの成長発達に対する不安については特に影響を与えないけれども、母親が育児によって欲求不満を高めると、父親が自分自身の育児能力に対する不安を高めるといふ結果である（表14-1, 表14-2, および表14-3）。

このように、全体的に見れば、母親の育児不安が高いほど父親の育児不安も高い傾向が見られる。特に、母親の育児不安感情が高いと父親の育児不安は全体に高まるし、また子どもの成長・発達や自分の育児能力に対して母親が不安を抱くと、父親も子どもの成長・発達や父親自身の育児能力に不安を感じるようになる。

6. ま と め

以上の考察を要約的にまとめると、以下のようなことになる。

第一に、育児を母親に任せきりにするのではなく、父親も分担して主体的に育児に参加するほうが、父親が子どもの成長・発達に対して不安を抱きやすい。その反面、育児に主体的にかかわることによって、子どもに対する理解が深まり、煩わしいとかイライラすると感じる事が少なくなる。

第二に、母親の育児の仕方（しつけ）に対して父親が満足していなければ、子どもに対してイライラするなど、育児不安感情を抱きやすい傾向がある。

第三に、夫婦間のコミュニケーションの程度が、父親の育児不安感情に影響を与える。コミュニケーションが少ないと父親の育児不安感情が高まり、逆にコミュニケーションが十分とれていれば、父親の育児不安感情は低くなる。しかし、父親は十分にコミュニケーションをとっていると思っても、母親がそう思っていない場合には、母親も父親も育児不安感情が高まる。これは、母親が夫婦のコミュニケーションに不満を抱き、その結果、イライラなどの育児不安感情を高め、それが父親の育児不安感情を引き起こすためだと思われる。

第四に、母親の育児不安は父親の育児不安に影響を与える。母親が子育てにイライラするなど育児不安感情を高めると、父親の育児不安が全体的に高まる。母親が子どもの成長発達に対して不安を感じたり、自分の育児能力に不安を感じると、それを受けて父親も子どもの成長・発達や自分の育児能力に不安を感じる度合いが高い。また、母親が育児によって欲求不満を感じると、父親は自分の育児能力に不安を感じる傾向が見られる。

【注】

- (1) 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞」『家庭教育研究所紀要（No.3）』（1982）34-56頁
- (2) 例えば、本村汎・磯田朋子・内田昌江「育児不安の社会学的考察」『大阪市立大学生活科学部紀要』第33巻（1985）、佐々木保行・佐々木宏子「乳幼児をもつ専業主婦の育児疲労（第1報）・

育児不安に関する研究

(第2報) 『宇都宮大学教育学部紀要』第29巻(1979)・第30巻(1980), 深谷和子・植木陽子「母親の示す育児不安に関する一考察」『東京学芸大学紀要(第1部門)』第37巻(1986), 佐々木保行・高梨一彦・本郷一夫「母親の Child Rearing Burnout に関する基礎的研究」『鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)』第6巻(1991)などのほか, 兵庫県家庭問題研究所『核家族の育児援助に関する調査研究報告書』(1987), 横浜市民局『横浜市民女性の生活実態と意識調査』(1988), 東京都生活文化局『母親の就業を中心とした社会参加と親役割に関する調査報告書』(1990)などの報告書。また牧野自身もその後幾つかの調査研究を行っている。牧野カツコ「働く母親と育児不安」『家庭教育研究所紀要(No.4)』(1983), 「乳幼児をもつ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連—」『家庭教育研究所紀要(No.6)』(1985), 「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」『家庭教育研究所紀要(No.9)』(1987), 「<育児不安>の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要(No.10)』(1988)など。

- (3) 本村汎・磯田朋子・内田昌江, 前掲
- (4) 牧野カツコ, 前掲「<育児不安>の概念とその影響要因についての再検討」
- (5) 本村汎・磯田朋子・内田昌江, 前掲, p.12.
- (6) 森下正康「不安」森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』(1993有斐閣) pp.1244-1245。都留春夫「不安」梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新監修『心理学事典』(1981 平凡社) pp.740-741。
- (7) 生月誠『不安の心理学』(1996 講談社現代新書) p.85.
- (8) 生月誠 前掲 p.34.
- (9) 日本総合愛育研究所編『子ども家庭施策の動向(別冊[発達]21)』(1996 ミネルヴァ書房)には, 厚生省や文部省, また自治体の保育政策の報告事例が収集されている。
- (10) 住田正樹(九州大学), 藤井美保(香蘭女子短期大学), 田中理絵(九州大学大学院, 日本学術振興会特別研究員)による共同調査。この「母親の育児不安」の調査結果は, 日本子ども社会学会大会第4回大会(平成9年6月6~8日, 於・東京学芸大学)において発表された(発表者: 田中理絵)。
- (11) 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子編『子どもの発達と父親の役割』(1996 ミネルヴァ書房) 巻末には, 父親に関する研究論文・著作リストが掲載されている。
- (12) 九州大学教育学部地域教育社会学研究室『育児に関する調査』1997年2月。

[付記] 本稿は, 日本子ども社会学会大会第5回大会(平成10年6月12~14日, 於・宮城教育大学)における共同研究発表(住田正樹, 藤井美保, 田中理絵による共同研究。発表者は藤井美保)に若干の加筆修正を行ったものである。

A Study on Child-Rearing Anxiety
— In case of fathers —

Masaki Sumida & Miho Fujii

The aim of this research is to clarify the actual condition of fathers' child-rearing anxiety. Some researches have dealt with mothers' child-rearing anxiety, because the idea was widely accepted that child-rearing is a role of mothers.

Increasing participation of mothers in public affairs, fathers are expected to participate in the housekeeping and child-rearing, and actually they do. Then we made an investigation on child-rearing anxiety into 570 pairs of kindergarten pupils' parents. At this time, we classified child-rearing anxiety into three types. One is the feeling of discomfort which is brought by child-rearing, one is the anxiety about child's growth and development, and another is the anxiety about one's own ability of child-rearing.

The principle findings are as follows.

- 1) The fathers who participate in child-rearing tend to feel anxiety about child's growth and development. They observe their children closely when they take care of them and would become anxious about their growth and development. But they have the discomfort feeling less than the fathers who leave child-rearing to their wives. The experiences of taking care of their children would lead to deep understanding on them and they reduce their discomfort feeling brought by child-rearing.
- 2) The fathers who are not satisfied with the way of child-rearing of their wives have the discomfort feeling more than the fathers who are satisfied with it. Fathers' dissatisfaction with the way of child-rearing of their wives means their children's are ill-mannered. Fathers would feel discomfort when they are with their ill-mannered children.
- 3) Communication between father and mother influences the father's feeling of discomfort brought by child-rearing. The less communication brings the discomfort feeling and the more communication reduces it. But in case of fathers who think they communicate enough with their wives and their wives don't think so, their feelings of discomfort are higher than that of fathers who think their communication is not enough.
- 4) The child-rearing anxiety of mothers influences that of their husbands. For example, the higher the mothers' discomfort feeling, the higher their husbands'. The fathers also feel anxious about their children's growth and development and about their own ability of child-rearing, if their wives have the anxiety about them. And when mothers have frustration through their child-rearing, their husbands feel anxious about their own ability of child-rearing.